センター運営における学生ボランティアの育成

竹川大介[*]，松尾太加志[*]，隈本覚[**]，岡田好史[**]，武藤直彦[**]
（北九州大学　情報処理教育センター）

はじめに

北九州大学情報処理教育センター（以下センター）は，1996 年４月１日に発足し，同年７月１日からインターネットの一部開放を実施した。1997 年４月には学内ＬＡＮが完成予定であり，それに伴い，北九州大学のホームページも開設予定である。ホームページの制作は，センターや大学内の教職員によるものではなく，学生ボランティアの参加を募り，学生主体で行なうこととした。

学生ボランティアに対しては，ホームページ制作だけではなく，今後，簡単なＱ＆Ａへの対応，ＴＡとしての仕事，学生利用環境の構築など，センター運営への参画に発展することを期待している。さらに，この活動は，学生ボランティアに対する教育の一環として教育的な効果も目指したものである。

本報告は，学生ボランティアの募集からホームページ制作に至る経過報告である。

学生ボランティア活用の効用

本学においては，すでに 1995 年に 100 校プロジェクト参加の近隣の小中学校から，電子メールの文書などの翻訳の依頼を受け，28 名による学生ボランティアの活動を行なった。1995 年当時は，センターも未発足であり，インターネットの利用開放は行なっておらず，学生ボランティアにだけ，特別にメールアカウントの発行とインターネット利用のための環境としてコンピュータ室利用の開放を行なった。

この活動では，翻訳の依頼自体は少なかったものの，特定の学生がセンターに出入りするようになり，センターの運営において，ボランティア的にサポートを行なってもらった経緯があった。

このような学生ボランティアの存在は，センター運営の支援に寄与しただけではなく，学生に対しての教育の一環としても位置づけられるものであった。このような経験から，センター運営に学生ボランティアを活用するには次のような効用が考えられる。

スタッフ不足に対する支援

本学においては，センターに専任の教員はおらず，学部兼任の教員がセンターを運営している。ホームページの制作ひとつを考えても，兼任所員には過負担であり，学生の支援に期待するところが大きい。

さらに，将来的には利用者からの簡単なＱ＆Ａに答えられるようなボランティア，ＴＡとして育成をしていきたい。

学生の感性の取り込み

大学のホームページは大学進学をめざしている高校生をある程度ターゲットとしているが，高校生が大学のどのような情報を知りたいのか，また，大学に入っての利点が何であるのかは，教職員よりも大学生自身がよく知っているはずである。また、ホームページでのデザインにも若い学生の感性が活かされることが期待される。

---

[*] 文学部所属。情報処理教育センター兼任所員。

[**] 経済学部所属。情報処理教育センター兼任所員。

さらに，今後，学生のセンター利用環境構築に学生ボランティアを活用する予定であるが，学生がどのような利用環境を求めているのかを直接知ることができる。

教育的効果

ホームページの制作を情報処理教育の一環として取り入れることは多いが，このボランティア活動は，授業の一環というよりも，サークル活動的色彩が強い。授業では学生は受動的になりがちであるが，このようなボランティアの活動の形態をとることによって，自主的にコンピュータやホームページ作成に関する学習がなされることが期待される。また，学部学科学年を越えた交流も盛んとなり，サークル活動の持つ良い面を取り入れた学習効果が期待される。

情報リテラシー

学生は，一般には，センターの一利用者にすぎないが，管理側の立場に立つことによって，運営における役割をもたせることができる。このような経験は，情報環境の運営の大変さや情報化社会の問題点などについて直接的に学習をする機会を与えるものであり，広く情報リテラシーの学習であるとも考えられる。

情報発信のボトムアップ効果

大学のホームページは，大学の広報としての活動であるため大学全体の共通理解が必要となる。ただし，ホームページの作成に関して，トップダウン的に，各教職員や各部署に強要をしても成功はしないと考えられる。そのため，学生ボランティアによるホームページ作成が盛んになれば，学生のほうからホームページ作りの関心が高まり，ゼミやサークルなどからボトムアップ的にホームページ作成の気運が拡がっていくことが期待される。

学生ボランティア募集までの経過

学生ボランティアは，ホームページ作成の「サポーター」という名称で募集をした。募集対象は，コンピュータへの知識がない人でも，興味がある人なら誰でも応募してよいこととした。特典としてメールアカウントを発行することとした（本学では，現在はまだ一般学生にはメールアカウントを発行していない）。1997 年６月に約２週間に渡って学内の掲示板に掲示するとともに，センター所員が担当の授業などで呼びかけた。その結果，68 名の応募者（最初の説明会に出席をし，アンケートに回答した者）があった。

応募者が予定人数（約 20 名）を超えていたため，アンケートを実施し，その回答内容により選考を行なった。アンケートは，ボランティアに参加したい主な理由，参加できる時間帯，パソコン操作の能力，パソコン以外で得意なものを選択回答として尋ね，さらに自己アピールを自由記述させた。

このアンケートの回答内容から，７名の教職員がそれぞれ 30 名の候補を選考し，さらに協議の結果，28 名（男 14 名，女 14 名）に絞りこんだ。その内訳は，表１の通りである。

表１　学生ボランティアの一覧。()内は応募者数。

学部等	１年	２年	３年	４年	Ｍ１	Ｍ２	計
文	5	2	0	1			8
	(20)	(2)	(3)	(2)			(27)
経済	5	1	0	4			10
	(11)	(3)	(3)	(4)			(21)
外国語	0	0	4	3			7
	(1)	(2)	(6)	(2)			(11)
法	0	2	1	0			3
	(1)	(3)	(1)	(0)			(5)
大学院					0	0	0
					(1)	(1)	(2)
合計	10	5	5	8	0	0	28
	(33)	(10)	(13)	(10)	(1)	(1)	(68)

アンケートの結果について，ボランティアに参加したい主な理由を表２に，パソコン操作の能力

を表３にまとめた。

表２　参加したい主な理由。（）内は応募者全員。

選択項目	回答数*	
ホームページ作成等に参加できるから	25	(54)
パソコンについてもっと知識を得たいから	24	(57)
大学生活の記念になるから	16	(30)
電子メールのＩＤがもらえるから	15	(35)
自分の知識を役立てたいから	13	(19)
とにかく何かしたいから	9	(26)
卒業して役立つと思うから	9	(23)
パソコンは知らないが, やる気だけはあるから	8	(22)
多くの友達と知り合えるから	6	(24)
特別措置があるから	1	(2)
何もすることがないから	1	(5)
先生の薦めだから	1	(2)
友達に誘われたから	1	(7)

＊複数回答

表３　パソコンの操作経験。()内は応募者全員。

選択項目	回答数*	
パソコンをもっと知りたい	9	(26)
ワープロ程度は出来る	8	(19)
パソコンは使い慣れている	5	(7)
パソコンは，あまり知らない	4	(9)
パソコンについては自信がある	3	(6)
自分でホームページを持っている	3	(3)
ゲームをした程度である	1	(6)
表計算程度は出来る	0	(0)
合計	33	(76)

＊一部複数回答者あり

参加理由は，ホームページ作成とパソコンについてもっと知識を得たいという回答が多く，コンピュータに対する興味関心，勉学意欲が高い学生の応募が多くみられた。このことはパソコンの操作能力の回答にもみられ，ある程度パソコンを利用したことはあるが，パソコンについてもっと知りたいという動機づけが高い学生が多いことがわかる。

ボランティアの選考にあたっては，　必ずしもコンピュータ利用経験が豊富な人を選考するのではなく，自己アピールでの意欲が見られるものも選考をした。また，デザインやイラストを描くことが得意であるなど，コンピュータ能力以外でホームページ制作に役立つ能力を持っている学生も選考の対象とした

活動経過と予定

28 名の学生を６～８名からなる４つのグループに分け，それぞれの活動のスケジュールをたて，自主的な活動にまかせることにした。

学生が利用できる環境は，コンピュータが６台設置してある部屋を開放した。Windows95 を OS として，WWWブラウザ，メーラ，ワープロ，お絵描き，ホームページ作成ツールなどのソフトウェアを装備した。また，スキャナやデジタルカメラの利用も可能である。さらに，学生個人用のロッカーも設置した。

教員が関わるのは，最初のメールの講習などを含んだ説明会（1997/7/1）と，その後適宜開いた全体会議（1997/7/14，1997/8/7...）で進捗状況や問題点について議論するのみである。学生との連絡や質問などは，メーリングリストを活用して行なうこととした。

学生にはスケジュールを以下の予定で行なうことだけの指示を与えた。

1997 年 7 月

・コンピュータの基本的な操作の習得

　テキストを打てるようになる。メーリングリストを利用してテキストの入力に慣れる。わからない学生に対しては，グループ

の中で教え合う。

・ＨＴＭＬの練習

既存のホームページのＨＴＭＬソースを読み込み，テキスト部分や画像部分を置き換えるなどして，ＨＴＭＬの練習を行なう。わからない場合は，メーリングリストを活用して尋ねる。

・スキャナー，お絵描きソフト利用の習得

デジタルカメラ，お絵描きソフトの使い方に慣れる。

1997 年８月

各グループごとに，情報処理教育センターのホームページ作成を行なう。９月初旬にコンテストを行なう。

1997 年９月

CGI, JAVA, JAVA Script の勉強会を行なう。また，大学のホームページ作りを各グループごとに行なう。

学生は，開放室のコンピュータの利用状況簿に記録するとともに，活動スケジュール表を作成し，自主的に活動を行なっていった。７月までの開放室利用状況を表４に示した。

また，７月までのメーリングリストの利用状況について書き込み数とメールの内容について表５及び表６に示した。

表４　コンピュータ開放教室の利用状況。

	入室利用回数							
	0	1～3	4～6	7～9	10～12	13～15	16～	合計
人数	2	11	6	4	2	2	1	28

表５　メーリングリストの書込み数（教職員も含む）。

	書込み回数									
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
人数	12	11	2	2	1	0	2	2	0	32

表６　メーリングリストの内容分析。

内容	ポスト数
活動の運営に関わること	12
自己紹介	11
個人的な話題	11
バイト募集など	5
技術的な情報	4
コンピュータに関連した話題	4
コンパに関する話題	4

表４をみる限り特定の限られた者だけがコンピュータを利用していることがわかる。この傾向はメーリングリストにもうかがえ，活動当初はメーリングリストの活用が十分にされておらず，ほとんどの学生が書き込みをしていない。書き込みをしている学生も，自己紹介などにとどまっている。

しかし，実際の活動は，学生たちは自ら，ホームページ作成のテキストを購入したりするなど，自主的な勉強活動を行なっており，今後の成果が期待される。

まとめと今後の課題

ここで報告したボランティアの活動はまだ進行中であり，経過報告に過ぎないものである。当初問題となったのは，応募者の学生の中からいかにいい人材を確保するかであり，今回はアンケート調査を行い選考をしたのが，この方法が妥当であったかどうかは今後検討をしなければならない。

また，そのボランティアをいかに育成していくのかも検討を要するところである。学生の自主的な活動を中心とし，教員との連絡などにはメールを活用することを考えたが，まだ，今後，このボランティアの活動をうまく軌道にのせることが課題である。